みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

韓国社会の地域性 (地域性と歴史)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008413

韓国社会の地域性

朝倉敏夫

地域性は、それぞれの地域が有している総合的な個性であり、それぞれの地域における自然・人文に関する多くの事象の相互作用による総和であると解されている。

こうした地域性に着目して、日本社会をいくつかの異質的な社会構造の集合として理解しようとする試みが、農村社会学・法社会学・民俗学などの日本社会研究において展開されてきた[1]。

民族学の立場からは、岡正雄の多元的な日本民族文化起源論に触発された形で、蒲生正男、江守五夫、住谷一彦などによってさまざまな村落構造類型論が提示された[2]。また、日本文化の地域性については、泉靖一を中心としたプロジェクトにより一九六二年に北海道を除く日本各地の一一一三の大字を対象に質問紙法による調査が行われ数量的に把握されるとともに（Nagashima & Tomoeda 1984）、大林太良が、歴史、民俗、生態の視点から新たな文化領域を設定し（一九九〇）、米山俊直が、小盆地宇宙論（一九八九）を提起している。さらに、パーソナリティに関して祖父江孝男をはじめとする「県民性」の研究がある（祖父江：一九七一）。

このように、日本社会・文化については、その地域性が多くの民族学者の関心を引きつけ、多くの成果を収めてきたといえよう。[3] これに対して韓国社会・文化については、これまでその地域性がほとんど論じられてこなかった。本稿では、日本社会・文化の地域性をめぐる論議を念頭におきながら、韓国における地域性について、その形成条件と地域区分を提示し、これに関する従前の民俗学・民族学的研究を整理し、今後の研究における課題について検討することにする。

一　地域性の形成条件

大林は、「文化領域設定の要因として、自然環境ないし生態的要因を重視する考え方と、歴史を重視する考え方がある。ここで東アジアのように、高度な、かつ個性ある文明が併存していた地域では、(1)まず主として歴史的要因によって朝鮮文化といった大区画が設定され、(2)次にその内部に中区画が設定されるとき、そこには生態学的要因が働いている。その下のレベルの小区画は、主として歴史的要因によるものであろう。自然環境という要因は、もはや大きな生態学的領域の相違というよりもむしろ、河川、山脈などによる交通の便不便というようなものである」（大林：一九九〇　二四〇～二四二）と述べている。ひとまずこれを前提として、朝鮮半島において地域性を形成すると考えられる歴史的要因と自然環境的要因について言及しておこう。

1　歴史的要因

ここで朝鮮の歴史を詳述はできないが、七世紀に国家として統一され、その後王朝が変わり、繰り返し継起す

る各時代の中国文化の影響を受けてきたが、十四世紀末に李氏朝鮮になってからは中央集権的な支配の下で数百年にわたり一元的な歴史を辿ってきたといえよう。

しかし、その歴史意識においては、七世紀以前の三つの王国、高句麗・百済・新羅の「伝統継受の思想」が強く反映されてきている。「慶州と全州と平壌と、この三つの地は、伝統的精神を継受してきた。嶺南(慶尚道)・湖南(全羅道)の両南における人心の相違や、平壌周辺(平安道)の風土や文物の特色に、はるか今日にまで、その余韻を認むるに難くないのである」(中村：一九七一　四七)。こうした歴史意識は、現実の地域格差や地域感情の理由づけとして強く作用し、全羅道と慶尚道の間にある対抗心を説明するとき、その理由を百済と新羅の確執に求めることが往々にしてある。[4]

2　自然環境的要因

自然環境としては第一に地形による地域区分がある。半島の東部は、低山性の山地と浅い谷とが発達し、分水界は著しく東に偏し、海岸平野はほとんどないが、西部は、長く緩やかな川が流れ、平野が至るところにある。また海岸線も、東海岸は出入りが乏しく、沿岸にはほとんど島を欠き、海は急に深いのに反し、南・西海岸は出入りが極めて多く、島も無数で、海は遠浅である。

第二に気候による地域区分がある。現在一般的に使用されている気候区分によれば、大きくは南部の温帯気候と北部の冷帯気候に分けられ、北部は南北の気温差によって中部と北部に分けられている。さらに小区分として、それぞれ西海岸型、内陸型、東海岸型に分けられ、大陸性が強い蓋馬高原型と海岸の影響を常に受ける南海岸型が加えられている。

こうした自然条件に適応して生業の区分がなされる。農業区分では、中部以南において、西部の平野では従来から農業が発達し、ことに湖南地方は米の産地として知られている。一方、東部では洛東江の流域で米のほか麦が生産されるが、その他は山地である。こうした違いは、土地所有形態の相違を生み、社会階層の構成においても違いを見せてきた。

さらに解放後に、東部の嶺南地方で工業化が進められたのに対し、西部の湖南地方では開発が遅れ、交通網の整備とも関連し、東部の工業地域に比して西部の経済は停滞性を示しており（閔俊植：一九七一）、両者の間に経済的な地域格差が生じている。

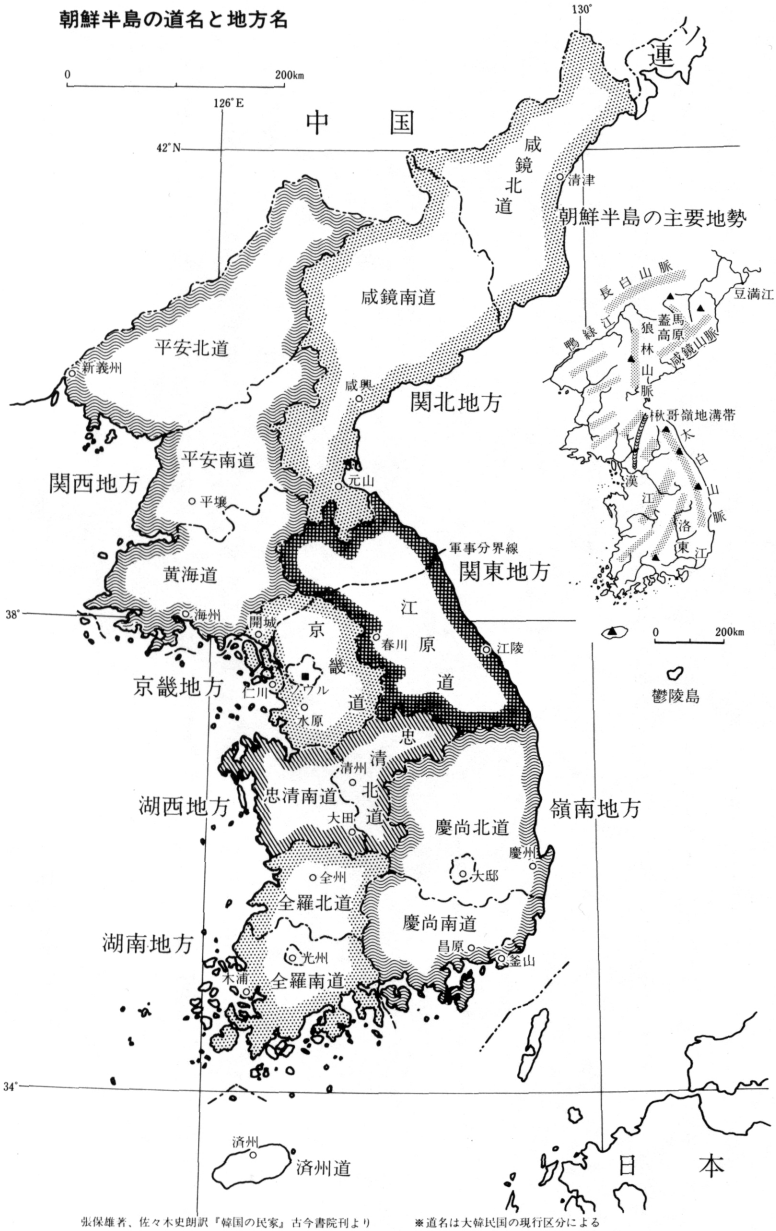
二　地域区分

こうした歴史的要因と自然環境的要因に基づいて、朝鮮半島ではこれまで次のような地域区分がなされてきた。

1　「道」

古来、朝鮮では風水地理説により地脈を精密に検討し、分水界あるいは山脈が行政区画に利用され、李朝初期に咸鏡、平安、黄海、江原、京畿、忠清、慶尚、全羅の八道制がしかれた。この朝鮮八道の地形や気候、産業・交通の状況、人間の気質、名勝、各地に伝わる故事などは李重煥による『択里志（朝鮮八域誌）』に記載されている。甲午改革後の一八九六年に、行政的に咸鏡、平安、忠清、慶尚、全羅の五道をそれぞれ南北二道に分けた十三道制をしき、現在は南北の両国家において九道ずつの行政区画を行っている。

朝鮮半島の道名と地方名



弘保雄著、佐々木史朗訳『韓国の民家』古今書院刊より　　※道名は大韓民国の現行区分による

2　北部・中部・南部と東部・西部

朝鮮半島はソウルから元山に至る楸哥嶺地溝帯を境として北部と南部に分かれ、北部は狼林山脈を境として咸鏡道中心の東北部を関北とよび、平安道を中心とし黄海道を含めた西北部を関西とよぶ。京畿道、江原道、忠清道を中部地方とし、全羅道、慶尚道、済州島（現在は済州道をなす）を南部地方とする。また京畿・忠清両道をさして畿湖（あるいは忠清道を湖西）、江原道を関東、全羅道を湖南、慶尚道を嶺南とよぶ（谷浦：一九八六　四六九）。

三　地域性に関する従前の研究

こうした地域区分を踏まえて、民俗学・民族学的視点から地域的差異について言及された主な研究を概観してみよう。[5]

1　方言

韓国語の地域的差異は済州島を除いてはそれほど大きくはないが、一応、北部方言（平安道方言・咸鏡道方言）、中部方言、南部方言（全羅道方言・慶尚道方言）、済州道方言の四ないし六方言に分けられる（高大民族文化研究所：一九八〇　一八〇～一八四）。

2　衣食住

【郷土食】　「八道名産物」「八道味楽」という言葉に表されるように、各道における特産物の紹介がなされるが（文化財管理局：一九八七）、食事内容の違いは宮中料理と庶民の料理という階層差が大きい。

【民家】　韓国の民家型の分類については諸説あるが（張保雄：一九八一、金光彦：一九八八）、複列型民家が分布する北東部と単列型民家が分布する南西部、および済州島型に大区分することができよう。

3　社会構造

【家族】　家族の規模・構成についてはもっぱら都鄙の差異が強調され、地域差についての言及はあまりないが、済州島は半島部に比べて明らかに小規模で単純な構成を統計的にも示しており（崔在錫：一九八二　一七～六三）、夫婦単位の世帯的色彩が強いことが知られている（佐藤：一九七三、一九七六）。

李光奎は家系継承の方法に着目して、家長権・主婦権の生前譲渡と部屋の引き渡しを特長とする「東南型＝隠居型」[6]、それらをすべて死後譲渡する「西部型＝終身型」、家系を継承する長男は最初に世帯を始めたときから独立した家長権を所有する「済州型＝独立型」、そして結婚と同時に息子は分家するが、すべての息子が分家した後長男は再び父母と同居し家系を継承する「その他（咸鏡道）＝再帰型」の四類型を設定する（李光奎：一九七五）。このうち、部屋の引き渡しと関連して「東南型」と「西部型」とに家屋構造の相違があると指摘しているが、民家研究の成果と重ね合わせた検討はなされていない。

【婚姻】　婚姻規制の一つとして、縁を重ねるという意をもつ「ヨンジュル婚」についての報告がある。この一定地方の支配者層に位置づけられる複数の氏族が、通婚グループを形成し、仲媒を介して相互に婚姻関係をむす

び、婚戚関係を重複させる結婚形態が慶尚北道の旧両班層に見られるという（山中：一九八二）。

【親族・村落類型】　日本では親族論が地域類型論として展開されたのに対し（上野：一九八六）、韓国ではもっぱら「両班」と「常民」という階層に関して論議されてきた。

そのなかで、金宅圭は早くから「韓国基礎文化の地域類型性研究」に着手し、慶尚道安東郡の両班村のモノグラフを表した（金宅圭：一九六四）。しかし、その金自身がその後述べているように、「韓国の村落類型として仮定した同姓結合的村落と各姓契聚的村落の両者について、その地域差の有無に関しては直接調べていないし、またあまり調査もされていない」し、「韓国の村落調査においては、日本の村落類型論と地域性の理論に対比しうる傾向にはその研究方向は進められなかった」（金宅圭：一九八二　二六八）。

ただ、その分布について「現在、筆者の考えでは、全国的に入り交じって分布しているか、あるいは、今のところ確言はできないが、著名な同族村落の周辺に各姓村落がとりまくような形で混在しているようにも思われる」と示唆するとともに、脚注で善生永助の『朝鮮の聚落』にふれ、「これが韓国における同姓部落の地域的分布の特徴を示すものと受け取るには同族村落と同族集団の区別の曖昧さなどの問題がある」と断りつつ「彼のいわゆる同族村落が慶尚南・北道にことさら多く分布している状況はある程度つかめる」としている（金宅圭：一九八二　二六八）。他方、「茅亭」という部落共同の休息・集会所が全羅道に集中して存在するということについて、崔在律は「茅亭は対内的平等性と対外的封鎖性をその属性とする部落共同体の産物とし、民村に多く班村にはまれである」（崔在律：一九六六　二八）ことを指摘している。その意味では、慶尚道すなわち嶺南地方は「両班」的性格が濃く、全羅道すなわち湖南地方は「常民」的性格が濃いといえるかもしれない。

このような地域の性格づけとともに、村落類型論との関連で地域性を考察するには、「班村」「民村」の概念を

明らかにしたうえで、同じ「班村」あるいは「民村」であっても地域によってどのように異なるのか、たとえば慶尚道と全羅道というような異なる地域の「班村」あるいは「民村」同士の比較研究をすることに意義があるのではないだろうか。

4　農耕儀礼

社会組織において「地域性研究」は中断したかに見えた金宅圭は近年、「筆者が試図している一連の研究は韓国の基層文化領域を韓国文化を構成する様々な文化要素の分析を通じて設定してみることにある。そしてこの焦点は韓国の基層文化領域を設定する最初の試図として、重要な基層文化要素と見ることのできる歳時風俗とこれに随伴する民俗芸能の構造に表れる文化領域の特性について論及してみるものだ」（金宅圭：一九八五　四四七）として、農耕儀礼を中心として韓国の基層文化領域を設定すべく仮説を提示した。それは、水稲栽培を行い、秋夕つまり八月十五夜を主な祭りとする「秋夕圏」、五穀栽培、ことに焼畑耕作を特徴とし、五月五日の端午を主な祭りとする「端午圏」、五穀の栽培と水稲耕作が混合し、端午と秋夕がともに重要である「秋夕・端午複合圏」という三領域であり、「秋夕圏」はいわば古代の百済、「端午圏」は高句麗、「複合圏」は新羅の領域にほぼ相当している。そしてこれらの領域において、クッ（巫俗祭儀）の系統とその担当者である巫覡の主たる名称と成巫過程、請拝または奉祀される神と使用される主要楽器、そしてクッを構成している主たる芸能についてそれぞれの特徴を示している（金宅圭：一九八五）。

この他農耕に関して、村山智順の『釋奠・祈雨・安宅』（一九三八）を資料とし、祈雨祭の地域的差異が指摘されている。京畿・江原道を境界として中部以南と以北で祈雨祭の行われる場所、犠牲動物、期間、司祭者に違い

がある（高大民族文化研究所：一九八二b　三四七～三四八）。

5　人生儀礼

人生儀礼に関しては『礼書』に書かれた儀礼と実際の慣行との相違に研究の主眼がおかれてきたが（張哲秀：一九八四）、ここでは地域差について言及されたものを記しておこう。

【婚礼】　慶尚道では新郎が婚礼に負担するのが多いのに対して、全羅道では新婦が新郎側に贈る礼物が多く嫁入り道具も多いということは、一般によく知られている。

このほか婚俗においては、新郎が新婦の家に行き、その後新郎の家に行くまでの「干帰」の期間に地域差が見られ、「小礼後当日干帰を行なうのは海岸島嶼地帯である」という。また「済州島では韓国的婚俗とは大きく異なる類型に属する婚俗をもっていた」（李光奎：一九八五　一六九～一七二）という。

【葬礼】　「草墳」と呼ばれる二重葬制が、李朝末期までは全国的分布を見せていたが、現在は半島の西南部と西南島嶼部に残っている（李杜鉉：一九七三）（西村：一九八四）。

【祖先祭祀】　これは儀礼のあり方というより、相続・継承といった族制との関連で考察されるべきであるが、「韓国社会において典型的な祭祀である長子単独奉祀が確立したのは一八世紀以降であり、一七世紀半ばまでは子女輪回ないし子女分割による奉祀が一般的であるとされている。ところで長男が祭祀を継承する儒教式祭祀とは異なる祭祀の分割が、内陸地方の山間地域や漁村、島嶼地方といった辺境地域に見られる」という指摘がある（呂重哲：一九八〇）。これについてはさらに、伊藤亜人によって珍島における「忌祭祀の分担」（伊藤：一九八三）が、竹田旦によって済州島、珍島における「分割祭祀」（竹田：一九八四）が報告されている。

6　信仰

【巫俗（シャーマニズム）】巫俗に関する研究は数多いが、金泰坤は「韓国の巫堂を機能上から見ると、A巫堂型、B丹骨型、C神房型、D明斗型の4類型に分けられるが、巫堂型は中・北部地域、丹骨型は湖南地域、神房型は済州島、明斗型は湖南地域（嶺南と中北部地域にも散発的に分布）にそれぞれ分布し、さらに大きくは中・北部に見られ、降神による神病体験を通して成巫する降神巫と、南部に見られ、司祭権の世襲により人為的に成巫する世襲巫とに分けられる」（金泰坤：一九八二　五四～五五）と述べており、この降神巫と世襲巫の地域的分布は通説になっている。

【家神信仰】祖霊、三神、成主、竈王、垈主、業（オプ）、厠神（かわや）、守門神、その他の九種が全国に一様に存在している。ただ済州島のみは形態も名称も全般的に大きく差異をもつ。また湖南が穀倉地帯のためか稲作儀礼性が強く芸能性も強いほか、嶺南の龍ダンチ、江原道山岳地帯の喂養間神（厩神）など多少色合いの違いもあるが、そう大きな特異性をもつわけではない（高大民族文化研究所：一九八二a　一二七～一二八）。

7　「道民性」

古来から八道ごとに、人心をその自然環境に譬えて、

「咸鏡道　泥田闘狗、平安道　猛虎出林、黄海道　石田耕牛、江原道　厳下石仏、京畿道　鏡中美人、忠清道　清風名月、慶尚道　泰山喬岳、全羅道　細柳春風」と表してきた。これが今日においても語り継がれ、強く意識されている。こうした気質は、「咸鏡・平安の人は性質強硬勇悍にして軍人に適し、全羅の人は技芸に長じて美術

工芸に適し、忠清・京畿の人は智謀弁才に長じて政治に適し、慶尚・江原の人は淳厚質朴なる文学の才あり、黄海の人は理材に秀で商業に適す」（『開闢』大正一四年七月号）という記事にあるように職業の適性に関しても言われている。[7]

こうした言い伝えに対し、金在恩は韓国人の意識と行動様式に関する調査の中で、地域対立をあおるような「道別差異は強調しないように」という配慮をしつつ、「地域（成長地）による差異としては、巷間言われるような全羅道と慶尚道では対照的ではなく、江原道と済州島の間で最も顕著である」（金在恩：一九八七　一二四二～二五九）と述べている。

四　地域性研究の課題

以上、それぞれの項目において地域差を生じさせた要因について詳細な検討が必要であるが、ここではこれらをおしなべて韓国の地域性研究がもつ問題と課題について指摘しておこう。

1　内陸部と海岸部／中心と周辺

人生儀礼の項目から見られるように、地域区分の一つのあり方として、内陸部と海岸部が想定される。内陸部と沿岸・島嶼部という生態学的条件の差、あるいは農業を生業する文化と漁業を生業とする文化の差として捉えることができよう。

これに関して伊藤は「儒教倫理の普及に伴って形成された階級的伝統には、中央との政治的距離に応じて各地

方ごとにかなりの地域差が見られる。（中略）階級的伝統のこうした地域差は、生活様式の地方差の一因ともなっており」（伊藤：一九八〇　三一五）と述べ、儒教倫理の教化の展開の差として捉えている。ことに儒教式に行われた伝統的な人生儀礼では、儒教の浸潤度により相違が出てくることが考えられる。その意味では儒教の浸潤という「時代性」を鑑みれば、内陸部と海岸部という区分は「中心」と「周辺」という区分に置き換えて捉えることもできる。

2　済州島の特異性

いくつもの項目で済州島の特異性が指摘され、強調されている。これに対して崔在錫は親族組織のあり方において「済州島の親族組織が、陸地（半島部）の常民、賤民、漁村や島嶼地域の親族組織間に相違点があるといっても、この相違は陸地農村との相違点に比べれば大きくなく、したがって韓国の親族組織の性格を大きく二大別すると陸地両班のものとその他の地域ないし階層の二つに分けられるのではなかろうか」（崔在錫：一九七九　一三）と述べ、儒教的伝統の存否・強弱、経済的貧富の差異による相違を指摘している。

このように済州島が両班モデルから外れた「周辺」という区分の中に捉えられるのか、あるいは済州島の特異性が独自のものであるか、済州島とその近隣島嶼などとの比較が望まれる。また済州島の研究においては、その内陸部と海岸部、東部と西部の差異も考察されねばならない。

3　基層文化領域論との関連

地域性の研究を進めるうえで、基層文化の領域についての説は参考となろう。農耕儀礼の項目で述べたように

金宅圭は「秋夕圏」「端午圏」「複合圏」の三領域を設定し、古代文化、神話、生産、民俗信仰、民俗演戯、民俗遊戯などの文化要素を「韓国基層文化領域と文化要素」という一覧表にして仮説を提示している（金宅圭：一九八五　四五五）。この文化領域は百済、高句麗、新羅という古代の政治領域とほぼ対応しており、古代からの基層文化の系統的多元性が示されているが、考古学の成果とも照合させたうえで一つのシェーマとして叩き台になろう。[8]

この一覧表において、家族・親族・婚姻や通過儀礼といった文化要素は空欄になっており、まずこれを埋める作業が進められ、さらにここに羅列された文化要素間にいかなる有機的連関があるかが考察されるべきであろう。

4　韓国社会の均質性

前述の一覧表の中で家族・親族といった族制が空欄になっているのは、それらの研究が不十分であるということもあろうが、社会組織における均質性の高さということにその理由があろう。

末成は、韓国の社会組織のうち、従来典型とされていたものから外れるものを若干の事例を中心に紹介し、両班モデルからの変差の幅を示しつつも、「韓国社会における均質性の強さが感じられる」（末成：一九八六　一一八）と述べている。その要因について金宅圭は「日本は地域性というものがくっきり表れる素地を生態学的にも地形的にももっている。韓国はある意味で同心円的にあらゆるものが広がり得る状況にある」という自然条件と、「村落形成の歴史的過程」という歴史的条件とにおける日本と韓国の違いを示唆している（金宅圭：一九八六　一三一）。

この韓国社会の均質性の高さは、日本社会における多様性と比して、それ自体が大きな特色であり、この違い

は韓国と日本における社会統合のあり方の相違も示している。日本では、歴史的・自然的条件の相違によって地域による多様性が生まれ、多元的に統合されてきたのに対し、韓国では李氏朝鮮以降、儒教による「正統的な」伝統が形成され、一元的に統合されるという歴史的条件に強く規定されてきた。日本社会が融通性をもって状況に対応しているのに対し、韓国社会は規範を遵守し、それに拘束的であるともいえよう。

5　周辺諸地域との関連

ある民俗慣行について自国のみならず周辺諸地域との比較で捉えようとする試みがある。[9] 例えば、竹田は「済州島など海岸部でみられる韓国の分割祭祀と、これと同種の慣行である日本における分牌祭祀との比較」（竹田：一九八四　五二）や「韓国の習俗を中心に東アジアにおける死霊結婚の比較」（竹田：一九八七）について今後の課題を示唆している。また江守は日本の婚姻成立儀礼が韓国のそれと対応性を示していることを指摘し、その中で「結婚式当日に嫁の引き移り（新行）が行われ、しかも三日目に婿同伴で嫁の里帰りが行われるという日韓両国に共通の婚姻慣習は、その分布領域が両国の相接する朝鮮海峡をめぐる地帯であることにかんがみ、文化史的関連性の蓋然性は極めて大きい」（江守：一九八二　一一七）と述べている。

こうした比較においては、文化史的関連性とともに、自然環境や生態学的条件が留意されなければなるまい。国家という歴史的条件を超えて生態学的条件を同じくする「沿海文化」を設定するならば、済州島と対馬海峡を挟む対馬、五島列島における民俗慣行の比較、日本海文化における「日本の山陰地方と朝鮮半島東南部との関係」（大林：一九九〇　二六〇）、あるいは黄海や東シナ海をめぐる比較など、日本や中国といった周辺諸地域との比較研究へと敷衍されるであろう。

＊　＊　＊

これまで韓国において地域性があまり論じられなかったのは、それが朝鮮半島での分断国家論に結びつくとか、国内においても地域格差および地域感情に結びつくという、政治・社会的タブーとされてきたことに一つの理由があろう。[10] と同時に、それが体系的に論じられるだけの資料の整備がなされていなかったという学問的な理由もあろう。

日本における地域性研究は、民俗学による膨大な基礎的資料の蓄積がその前提として存在していた。韓国においても近年、各地方において郷土研究の気運が高まっている。[11] また文化財管理局により各道ごとの『全国民俗綜合調査報告』、および衣、食、住、農楽・豊漁祭・民謡、巫儀式、礼節の各篇が刊行され、精神文化研究院から各道ごとの『韓国口碑文学体系』、国立民俗博物館から各地方の「長性・ソッテ」についての調査資料が刊行されるなど、全国的な資料が収集されつつある。こうした資料から、民俗分布地図の作成や統計的資料の分析を通して地域差を明らかにし、地域性を考察するための基礎的資料が整備されることが望まれる。

そして、何よりも民俗誌の作成が重要である。地域性の解明とは、場所を共通にして所在する事象は何らかの地域的関連をもつという前提にたち、その地域を構成する自然・人文・社会にわたる諸要素の相互の関連を明らかにすることである。日本民俗学において地域民俗学が標榜されたように、個々の民俗事象を一つの束として考え、これを伝承地域との有機的連関のなかで構造的に把握することが望まれる。

こうした具体的な事実に基づく資料の積み重ねによってこそ、地域性が本格的に検討される基礎ができるにちがいない。

註

（1）自然人類学、言語学、地理学からも尾本を中心として『日本人の地域性に関する研究方策の検討』と題する共同研究がなされている（尾本：一九八二）。

（2）従前の村落構造類型論については上野（一九八六　二三～二六）が簡潔に整理している。

（3）「文化人類学から見た日本人の地域性」については、祖父江（一九八二　四九～五二）を参照。

（4）地域的格差や地域感情は近年になってむしろ強調されている感があり、その要因は現在的問題にあるともいえるが、「高麗王朝が政治的意図により、風水地理説に則り、全羅道を「背逆の地勢」としたとするものである」（金両基：一九八八）、「一五八九年の全州人鄭汝立の謀反事件（己丑の獄）以来、全羅道が逆賊郷になったということが尾を引いている」（古田博司：一九八八　一七七）と歴史的要因を挙げるものもある。こうした歴史的要因も、韓国人の歴史観を考慮すると、あながち否定できない。

（5）大林は日本の文化領域設定における物質文化研究の立ち遅れを指摘しているが（大林：一九九〇　一三）、韓国においても同じ状況である。また口碑伝承の研究は盛んであるが、地域性について言及した研究は極めて稀である。なお焼畑耕作を行う「火田民」については、本稿では言及しない。

（6）この「隠居」をめぐる記述については、崔在錫をはじめ異論が出されている。この議論については、竹田（一九八〇）を参照。

（7）各道における人の気質・意識構造については、

文石南『全南人의意識構造』大旺社　一九八四年。

朴桂弘「忠南人의道民気質에対한民俗学的考察」『忠大論文集』九　人文社会篇、一九七〇年などがある。

（8）朝鮮民族文化を形成した基層文化として、依田は、（1）東北アジア系狩猟・漁撈民文化、（2）北方系焼畑栽培・狩猟民文化、（3）南方系雑穀焼畑栽培民文化、（4）水稲栽培（畑作複合）・漁撈民文化、（5）アルタイ系遊牧民文化、の五つを想定している（依田：一九八四　四八一～四九四）。

（9）近年、日韓両国において比較民俗学が標榜されているが、その方法論については改めて検討されなければならないと考える。

（10）政治・経済的問題をはじめ一般社会の出来事の中でも出身地域が強く意識され、それによる閥が作られたり、例えば韓国プロ野球の隆盛の要因にも地域フランチャイズ制の導入が挙げられる。こうした地域格差や地域感情に関しては、次のような文献が出されている。

文石南「地域隔差와葛藤에関한研究」『韓国社会学』一八　一九八四年、一八四―二〇九頁。

――――「地域葛藤와地域格差」『韓国社会와葛藤의研究』現代社会研究所、一九八五年、一三四―一七六頁。

高興化『資料로엮은韓国人의地域感情』星苑社、一九八九

（11）八〇年代の韓国における民俗への関心の高まりについては、拙稿（朝倉：一九八七）を参照。

参考文献

〈韓国語〉

張　保雄『韓国의民家研究』宝晋斎出版社、一九八一年（佐々木史郎訳『韓国の民家』古今書院、一九八九年）。

張　哲秀『韓国伝統社会의冠婚喪祭』韓国精神文化研究院、一九八四年。

崔　在錫『済州島의親族組織』一志社、一九七九年。

――――『現代家族研究』一志社、一九八二年。

崔　在律「茅亭이農村社会経済에미친影響」『湖南文化研究』四、全南大学校、一九六六年、一―六七頁。
金　在恩『韓国人의意識과行動様式』梨花女子大学校出版部、一九八七年。
金　光彦『韓国의住居民俗誌』民音社、一九八八年。
金　泰坤「韓国巫俗의地域的特徴」金仁會『韓国巫俗의綜合的考察』高麗大学校民族文化研究所、一九八二年、三一―五五頁。
金　宅圭『同族部落의生活構造研究』青丘大学新羅伽倻文化研究院、一九六四年（伊藤亜人・嶋陸奥彦訳『韓国同族村落の研究』学生社、一九八一年）。
――――『韓国農耕歳時의研究』嶺南大学校出版部、一九八五年。
高大民族文化研究所『韓国民俗大観一　社会構造・冠婚喪祭』、一九八〇年。
――――『韓国民俗大観三　民間信仰・宗教』、一九八二年a。
――――『韓国民俗大観五　民俗芸術・生業技術』、一九八二年b。
李　光奎『韓国家族の構造分析』一志社、一九七五年（服部民夫訳『韓国家族の構造分析』国書刊行会、一九七八）。
――――『韓国人의一生』螢雪出版社、一九八五年。
閔　俊直「湖南地域의構造的停滞性의要因分析」『地域開発研究』三～一、全南大学校一九七一年、一―二一頁。
文化財管理局『韓国民俗綜合調査報告書（郷土飲食篇）』文化公報部文化財管理局、一九八七年。
呂　重哲「祭祀分割相続에関한一考」『人類学研究』一、嶺南大学校、一九八〇年、二一―五四頁。
〈日本語・英語〉
朝倉敏夫「韓国民俗学の現状」『民俗学評論』二七、一九八七年、一一―二〇頁。
江守五夫「日本の婚姻成立儀礼の史的変遷と民俗―韓国との対比において」『千葉史学』一、一九八二年、九三―一一七

頁。
古田博司『ソウルの儒者たち』草風館、一九八八年。
伊藤亜人「両班の伝統と常民」『中央公論』九五～四、一九八〇年、三一二―三一九頁。
「儒礼祭祀の社会的脈絡」『儀礼と象徴』九州大学出版会、一九八三年、四一五―四四二頁。
金　宅圭「韓・日両国のいわゆる『同族』村落に関する比較試攷」江守五夫・崔龍基編『韓国両班同族制の研究』第一書房、一九八二年、二六七―三五六頁。
――――「討論―『韓国の社会組織』をめぐって」竹村卓二編『日本民俗社会の形成と発展』山川出版社、一九八六年、一三〇―一四五頁。
金　両基「全羅道に対する地域差別と風水地理説」辻村明・金両基編著『異文化との出会い』北樹出版、一九八八年、三〇―五二頁。
李　杜鉉「草墳」中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』東京大学出版会、一九七三年、一―一一頁。
Nagashima, N. & K. Tomoeda (eds.), *Regional Defferences in Japanese Rural Culture*. Senri Ethnological Studies 14, 1984.
中村栄孝『朝鮮―風俗・民族・伝統』吉川弘文館、一九七一年。
西村美恵子「韓国の草墳―研究史からの再検討」『民俗学評論』二四、一九八四年、五六―七一頁。
大林太良『東と西　山と海―日本の文化領域』小学館、一九九〇年。
尾本恵市『日本人の地域性に関する研究方策の検討』文部省科学研究費補助金研究成果報告書、一九八二年。
佐藤信行「済州島の家族―O村の事例から」中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』東京大学出版会、一九七三年、一〇九―一四五頁。

――「済州島の『サドン』」『南島』一九七六年、二一九―二三一頁。
祖父江孝男『県民性―文化人類学的考察』中央公論社、一九七一年。
――「文化人類学から見た日本人の地域性」尾本恵市『日本人の地域性に関する研究方策の検討』一九八二年、四九―七四頁。
末成道男「韓国の社会組織―そのヴァリエーションをめぐって」竹村卓二編『日本民俗社会の形成と発展』山川出版社、一九八六年、一〇一―一二三頁。
竹田　旦「韓国家族における『隠居』について」『日本民族文化とその周辺　歴史・民族篇』新日本教育図書出版、一九八〇年、六〇七―六二九頁。
――「韓国における祖先祭祀の分割について」『民俗学評論』二四、一九八四年、三二―五五頁。
――「東アジアにおける死霊結婚―韓国の習俗を中心に」『茨城大学教養部紀要』一九、一九八七年、一三―三九頁。
谷浦孝雄「地域区分」伊藤亜人他監修『朝鮮を知る事典』平凡社、一九八六年、四六九頁。
上野和男「日本民俗社会の基礎構造―日本社会の地域性をめぐって」竹村卓二編『日本民俗社会の形成と発展』山川出版社、一九八六年、二三―四六頁。
山中美由紀「韓国のヨンジュル婚（Yon'jul-hon）に関するメモランダム」『鹿児島経済大学社会学部論集』一、一九八二年、六三―七三頁。
依田千百子「朝鮮の基層文化とその源流」『朝鮮民俗文化の研究』瑠璃書房、一九八五年、四八一―四九四頁。
米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店、一九八九年。